

わたしの志・あなたの志

奨励	望月 修治【もちづき・しゅうじ】
奨励者紹介	日本キリスト教団同志社教会牧師 同志社大学神学部嘱託講師

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。

(ヨハネによる福音書 3章16―21節)

二つのモチベーション

同志社の教育の根本に何を据えるのか、新島襄は次のように語りました。「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」。同志社女子大学のホームページに「物事の本質を捉える力を身につける」ことを目指して教育を行うのがリベラル・アーツであると記されています。それから自治教会。これは新島がアメリカのボストンで出会った会衆派と呼ばれる自由に溢れたキリスト教の信仰を意味しています。リベラル・アーツと会衆派の自由に溢れたキリスト教信仰、この二つを車の両輪とすることによって教育を行う、それが同志社の教育の根幹、根っこです。真理を学ぶことと並んで大事なものは、それを深く広くそして、豊かに用いる心を育てることだと新島は語りました。アメリカでリベラル・アーツの教育を受け、会衆派のキリスト教の信仰に出会った、この二つが新島のモチベーションを深く育みました。

1864年、幕末に日本を脱国し、帰ってきたのは1874年、明治維新後の日本です。そして仏教の影響力がものすごく大きな京都にキリスト教主義の学校、同志社英学校を設立しました。大変な軋轢の中で同志社を設立したわけですが、新島は単なる勉学をする場所としての同志社ではなく、キリスト教によって心を育む、学んだものを用いる心を育てる、それが自分の使命なのだということに立ち続けて、同志社という学園を設立しました。学園同志社の根幹にあるのはキリスト教です。キリスト教抜きに同志社の143年の歴史は語れないのです。

同志社でキリスト教に出会う

わたしは同志社大学の今出川キャンパスで、毎週1コマですが講義を担当させていただいています。今年7年目になります。科目名は春学期が「旧約聖書とキリスト教」、秋学期は「新約聖書とキリスト教」です。昨年の秋学期、この講義を履修してくださった女子学生の方が、授業の期末レポートに次のように書いてくださいました。

私はキリスト教系の大学に在籍しているにもかかわらず、今までキリスト教に対して興味をあまり持っておらず、このまま特に関わりを持たずに卒業して行くのかと漠然と思っていた。そんな時この授業で洗礼者ヨハネの話聞き、胸に強く刺さるものがあった。彼は荒野で質素な生活をし、悔い改めて生きることを語り、イエスの救い主としての意味を人々に説いた。人は悔い改めるから赦されるのではなく、赦されるからこそ、方向を転じて自分を見つめ直すことができる。つまり悔い改めることができる。私はこの話を講義で聞いて、自分と重ね合わせた。私は中学生の時に、一度精神を病んでしまったことがある。授業に出ることができず、そのような自分が情けなくて、よく保健室で泣いていたものだ。何が一番辛かったのかというと、「みんな」と同じことを当たり前に出来ないことであった。そのような中でも、母が勧めたカウンセリングや、周りの人の助けもあり、無事高校に進学した。高校は進学校で、日々の勉強に追われていたが、その中でも友達と過ごす時間は楽しく、充実した生活だった。もう自分は大丈夫だと思っていた。けれども大学生になり、たくさんの人の中で授業を受けること、家に帰っても一人で、誰も話を聞いてくれる人がいないことなど、小さな不安や居心地の悪さが積み重なって身動きがとれなくなってしまった。母は私が自殺したらと心配し、私は上手く生きることができない自分に苛立ち、最悪の状況だった。そしてある日、実家に帰った。母は私に「自分を赦してあげなければだめだ」と言った。私はそれまで自分を価値がないのだと思っていた。けれども母の言葉は胸につき刺さった。自分が自分を赦さなければ何も始まらないのだと思った。そして私はまた京都に戻り、生活することができていた。私はこの経験を通して、赦す、赦されるという関係がいかに生きる上で重要で、価値がある行為であるかを知ることができた。だからこそイエスの存在をより身近に感じるのである。おそらくその人自身がその人自身を赦すことが一番良い行為だと思う。けれども上手くいかないこともある。その時に、母のように背中を押してくれる存在が必要になってくる。人によって、自分を赦してくれる存在は自由であってよい。それが宗教でも、本でも、恋人でも、漫画でも、何でもよいのである。ただ、前を向いて、またもう一度踏み出すためには、まず自分を赦す存在が必要だということは忘れてはならない。十字架刑から復活をとげたイエスのように私は立派になることはできない。それでも、私も誰かにとってのイエスのような存在になればよいと思う。赦すということは受け入れることもとることができると思う。救いを与えるなどということではできないかもしれないが、寄り添うことはできる。赦される安心感を知っている私だからこそできることがあるはずである。

この方は同志社に来てキリスト教に出会いました。同志社に来て聖書に出会いました。同志社という学園はキリスト教、聖書の世界を皆さんに、授業という形を通して、礼拝という形を通して紹介し、お招きしている学園でもあります。その招きに出会ったら、ぜひ聖書の世界に入ってみてください。そして食べてみていただきたいのです。傍らで見えていても栄養にはなりません。食べ物は食べてこそ栄養になります。聖書の世界も同じです。聖書の物語を食べてみる、体験し味わってみてくださったと思います。

聖書との向き合い方―絵本を読む・聖書を読む―

毎年春学期と秋学期、それぞれの講義の最初の時間に、履修してくださった皆さんに「聖書はとつきにくいかもしれませんが、絵本を読む感覚で聖書を読んでみてください」というお話をします。誰でも絵本と出会った体験をもっています。絵本の世界は動物たちが人間と会話したり、ブレイメンの音楽隊のように動物たちが人間の泥棒を追い出したり、魔法使いが現れたり、ジャックと豆の木のように雲の上まで伸びたマメのつるをつたって大男の家に行ったり、いろんな物語を楽しんできました。絵本の世界に出会い、その世界の中にグーツと引き込まれて行く体験は誰もが味わってきました。その感覚で聖書を読んでいただければと思っています。

神様とか聖書と言われるとたちまち心の扉が閉じます。聖書を読んでいくと、これは嘘か本当かということで聖書と向き合う方がとても多くおられます。絵本を読む時には大人も子どもも、この世界が嘘か本当かという尺度で絵本と向き合わない。もっと違った座標軸で絵本の世界を楽しむと思います。

聖書も絵本と同じ感覚で読んでいただきたいのです。聖書に書かれていることは嘘か本当か、事実か事実でないか、そういうふう読んでしまったら、聖書の世界は全く面白くありません。彼にとっても聖書はそういうものではないからです。いろいろな物語や出来事を通して、神という目に見えない存在が私たちにどんな働きをしてくださるのか、そのことによって人はどのように生きてきたのか、それを伝えようとしているのです。

ヘルムート・ティエリケというドイツの神学者が「聖書は神の絵本だ」と語りました。聖書は文字という絵の具を使って神の働きを物語る絵本のようなものなのだと言うのです。絵本を読むような感覚で楽しんで聖書に出会ってみていただきたいと思っています。

「同志社」のど真ん中

「新島襄を語る」シリーズ（本井康博著）の最終巻『志を継ぐ』の中に、次のように記されています。「『同志社』のど真ん中には『志』が座っています。『志』がなくなれば『同志社』ではなくなります。（中略）同志社が引き続き同志社であるかどうかは、新島の『宿志』が受け継がれるか、受け継がれないか、これで決まりです」（思文閣出版 2014年34、35頁）。『志を継ぐ』の本からもう少し引用させていただきます。

「一般的には、同志社は新島によって創立された、というふうに見なされています。世間では『新島の学校』とさえ、思われています。しかし、新島本人の受け止め方は、まるで違います。彼にとって、同志社の創立は、自分の想いから出たものじゃありません。神が自分に働きかけて、自分の中に起こしてくださった『願い』なんです。だから、同志社は最初から、さながら神の事業でした。起点は神、したがって事業主も神なんです。（中略）キリスト教学校（同志社）を開校するという『願い』は、神によって起こされた夢、志です。だから、それを完成させてくださるのも神、というわけです」（同書8、9頁）。

新島の「志」は新島という一人の人が抱いたものであったというよりも、神が新島を用いて起こされたことであったという、そのことにこそ同志社に連なる私たちは、焦点を結んでいくことを忘れてはならないと思います。

新島が選んだ聖書の言葉

今日読んでいますヨハネによる福音書3章、この箇所は新島が最初の説教の時に選んだ聖書テキストなのです。新島は1874年7月2日にアンドーヴァー神学校の課程を修了しました。これに先立つ5月10日に、新島はマサチューセッツ州レキシントンのハンコック教会で、初めての説教をする機会を与えられます。そして選んだのがヨハネによる福音書3章16節

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という箇所でした。この時の説教は次のように始まっています。

私が選びましたこの聖句は新約聖書の中でも大層目立つ、特異なものでありまして、数多くの聖書の読者がこれに惹きつけられてきたように思います。この聖句は福音の真理の神秘を美しく解き明かすものでありまして、何故神が愛する御子をさえ惜しまずにこの世にお与えになったのか、またいかなる条件の下でなら、この罪深い人類は永遠の命を得ることができるのかという問題を、はっきりと説明するのであります。まことにこれこそは福音物語の神髄であり、地上で私たちの救い主が果された役割の意味を解くカギであります（同志社編『新島襄教育宗教論集』 岩波書店 2010年 143頁）。

「この聖句は福音の真理の神秘を美しく解き明かすもの」「これこそ福音物語の神髄です」と新島が語ったこの言葉は「黄金の聖句」（ゴールデン・テキスト）と呼ばれています。聖書の中でも大切な言葉を黄金の聖句と呼ぶ呼び方があるのですが、ヨハネによる福音書3章16節の言葉もその一つに挙げられています。宗教改革者のルターもこのヨハネによる福音書3章16節の言葉を「福音のミニチュア」と呼びました。いくらでも大きく描ける真理を、できるだけ小さな言葉に凝縮させた表現がここにあるという意味です。

失われた存在を呼び戻す

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」という言葉の奥深さは何か。それを読み解く一つの手がかりは16節の後半の言葉にあると思います。「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という中の「滅びる」という言葉がキーワードです。この言葉はルカによる福音書15章に繰り返し使われています。そこにはイエスが語った三つの譬え話が記されています。100匹のうちの1匹がいなくなってしまうと、羊飼いがそれを見つけて大喜びする話、それから10枚の銀貨のうち1枚が無くなったために一生懸命探して、それを見つけて大喜びする女性の話、そして自分の財産を分けてほしいと生きている父親にねだって、さっさと家を飛び出して放蕩を重ねて結局、父のもとに帰ってきた息子の物語です。イエスがこの三つの譬え話で共通して語っているのは「失われた存在」です。1匹の羊が羊飼いのもとからいなくなった。1枚の銀貨が持ち主のもとから無くなってしまった。息子が父親のもとからいなくなった。「いなくなった」「無くなった」と訳されている言葉はいずれも、今日の箇所では「滅びる」と訳されているのと同じ言葉が使われています。滅びるということは、自分がかかわりを持ち、思いを寄せていた者のもとからいなくなってしまって、その存在が消えしもう、無くなってしまうことです。人間が神の懷から飛び出して、神ご自身にとって失われた存在になっている、その人間を呼び戻すために神は独り子を派遣してくださった。ご自分のもとから家出してしまっている者を呼び戻すことに一生懸命になってくださるのが聖書の神なのだと思います。

脱国者・新島

同志社は、新島襄がいなかったら今、存在はしていません。さらに言うなら、新島が1864年に函館からアメリカに向けて脱国しなければ、今日の同志社はありません。しかし新島の両親、民治ととみにとってみれば、新島の脱国は息子が「いなくなった」「失われた存在」になったという体験をすることでした。いなくなった子どものことを心配しない親はいません。新島が日本に帰国したのは脱国してから10年後の1874年11月です。新島はただちに群馬に向かい両親、姉たちと弟、家族との再会を果たします。新島は31歳になっていました。

息子がいなくなった10年を民治ととみはどのような思いで過ごしたのだろうかと思うのです。10年ぶりにいなくなっていた息子の姿を見て、無事を確認できた時の民治ととみの思い、喜びはどのようであったのだろうかとも思ってみるのです。

「志」を抱いた帰国者・新島

同志社は、新島襄がいなかったら今、存在はしていません。さらに言うなら、新島が1864年に函館からアメリカに向けて脱国しなければ、今日の同志社はありません。しかし新島の両親、民治ととみにとってみれば、新島の脱国は息子が「いなくなった」「失われた存在」になったという体験をすることでした。いなくなった子どものことを心配しない親はいません。新島が日本に帰国したのは脱国してから10年後の1874年11月です。新島はただちに群馬に向かい両親、姉たちと弟、家族との再会を果たします。新島は31歳になっていました。

息子がいなくなった10年を民治ととみはどのような思いで過ごしたのだろうかと思うのです。10年ぶりにいなくなっていた息子の姿を見て、無事を確認できた時の民治ととみの思い、喜びはどのようであったのだろうかとも思ってみるのです。